

東京大会(一次案内)

1 大会主題「みんなで広げる広がるインクルーシブ教育」

～多様な学びの場を生かした特別支援教育のこれからを当事者と考える～

2 大会趣旨

「インクルーシブ(inclusive)」とは「包括的」という意味であり、「排他的」という意味の「エクスクルーシブ(exclusive)」の対義語である。「『インクルーシブ教育システム』(inclusive education system)とは、人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり、障害のある者が『general education system』から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な『合理的配慮』が提供される等が必要とされている。平成24年に文部科学省から「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進(報告)」が出されてから約10年。学校の中で「インクルーシブ教育」はどこまですすんでいるだろうか。

学校現場においては、義務教育段階の全児童生徒数は平成24年からの10年間で0.9倍になった一方で、特別支援教育を受ける児童生徒数は2倍になっており、特別支援教育のニーズの高さが伺われる。令和5年3月の「通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議」報告では、通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への具体的な支援の在り方について方向性が示されると共に、通常の学級に在籍する知的障害のある児童生徒に対する通級による指導の研究事業が進められるなど、よりインクルーシブな学校運営モデルが検討されている。また、その方法の中では、「学校に恒常的に助言や支援がなされるよう、専門家等と学校との双方向での連携強化を図る必要がある。」とあり、多職種連携についても言及がされている。

全国情緒障害研究会が令和4年度に実施した全国基本調査では、

- ・「インクルーシブ教育システムの推進に全県体制で取り組んでいる」
- ・「通級のニーズにこたえるために通級指導教室を増設している」
- ・「特別支援学級の数が毎年増加している」
- ・「支援の必要な子どもが増えているが、専門的な知識で対応できる人員は十分とは言えない。」
- ・「多様な学び方などについて研究大会で取り上げているが、今までのやり方から抜け出せない教 師の割合がまだまだ多い」

など様々な現状の中で模索している様子があり、特定の方向性をもってインクルーシブ教育を進めることの難しさを感じる内容となっている。

しかし、令和4年9月の国連障害者権利委員会による「日本の報告に関する総括所見」では、障害のある児童への分離された特別教育が永続し、障害のある児童等が通常環境での教育を利用しにくくなっていること。また、障害のある生徒に対する合理的配慮の提供が不十分であることや通常教育の教員のインクルーシブ教育に関する技術の欠如及び否定的な態度などの懸念点が示された。その当時は多くのメディアで報道されることで、教員や保護者がインクルーシブ教育について考える機会になっていたが、その後、学校は変わったのか。

先の「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進(報告)」では、もっとも本質的な視点を「障害のある子どもと障害のない子どもも、できるだけ同じ場で共に学び、それぞれの子どもが、授業内容が分かり学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けていけるかどうか」であるとしている。今大会では、その原点に戻り、教師や学校側からの視点だけではなく、実際の教育を受けてきた当事者の語りを聞く中で、今後のあるべき学校の姿を参加者と共に考えていきたい。

3 期 日 令和6年7月27日(土)

4 会 場 オンライン

5 主 催 全国情緒障害教育研究会

6 参加費 無料

7 日 程 午前:基調講演 記念講演 午後:シンポジウム (日程調整中)

大会実行委員長 田中 良行 (豊島区立富士見台小学校 校長)

大会事務局長 植草 葉月 (国立市立国立第二小学校)

【連絡先】 E-mail: zenjoken@gmail.com

【HP】 <https://zenjoken.wixsite.com/zenjoken>